

〈原著論文〉

新型コロナウイルス感染症禍における健康と ストレスに関する学生の変化

— 2020年度と2023年度の比較から —

向 後 礼 子^{*1} ・ 山 本 展 明^{*2}

Changes in student awareness regarding health and
stress during COVID-19 :

Comparison of survey results in 2020 and 2023

(KOGO Reiko • YAMAMOTO Nobuaki)

1. 経緯と目的

2020年3月に新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）の世界的大流行（pandemic）がWHOにより宣言された。また、それ以前の2020年2月にはすでに文部科学省から卒業式や入学式について一律の自粛要請は行わないものの感染が発生している地域においては実施方法の変更や延期などを含めて対応を検討するようという事務連絡が出されており、大学を含めてその対応に追われることとなった（文部科学省、2020）。また、同年4月7日には緊急事態宣言が発出され、生活の維持に必要な場合を除いて、外出自粛も求められることとなった。そのため、学生は大学生生活のみならず日常生活においてもコロナ以前とはまったく異なる生活様式を求められることとなった。

なお、文部科学省が2020年5月に行った調査では、国公立大学の86.8%、私立大学の87.0%が授業の開始時期を延期させており、大学全体の96.6%が遠隔授業を実施・検討すると回答していた（文部科学省、2020）。「近畿大学でも2020年度前期は4月3日から5月31日まで、医学部を除き、学生・大学院生のキャンパスへの立ち入りが原則、禁止され、授業は5月11日から開始されたもののオンラインでの実施が主となった。また、同年、後期に関しても学部ごとに異なった対応が選択されたものの一部の授業を除きやはりオンライン授業が多く選択されていた」（向後、2021）。こうした中、学生がどのような状況におかれているのか、また、どのよ

*1 近畿大学教職教育部教授

*2 奈良教育大学ESD・SDGsセンター・特任助教

〔キーワード〕 新型コロナウイルス感染症、健康状態、精神状態、COVID-19、health、stress

うな課題が生じているのかを把握することは支援対策・体制を整える上でも喫緊の課題であり、多くの機関がアンケート調査等を通して現状を把握しようと試みていた。

例えば、コロナ過が大学生・院生の心身に与える影響について全国大学生生活協同組合連合会は、2020年4月20日から4月30日にかけて「緊急！大学生・院生向けアンケート」を実施した(アンケート内容は、授業形態、アルバイト、食事や睡眠、サークル活動など56項目)。回答のあった35,542件を分析した結果、「最近の体調で気になることはありますか？(複数可)」という質問に対して、「特に問題なし(10,077件)」とする回答が約3割あった一方、「やる気が起きない(11,693件)」「ストレスを感じる(9,825件)」「目の疲れ(9,778件)」などが報告された(全国大学生生活協同組合連合会, 2020)。日本私立大学連盟も2021年12月から2022年1月にかけて121大学58,082人の学部学生、大学院生を対象にアンケート調査を実施した。この調査の結果において「コロナウイルス禍の学生生活を経験して悩み、不安・心配に感じていることとして、最も多く挙げられたのは『就職や将来の進路(51.8%)』であり、次いで『自分の身体、精神のこと(35.9%)』であった。一方、「悩みや不安、心配はない」とした回答は9.4%と1割に満たなかった(日本私立大学連盟, 2022)。

こうした大規模調査と共にコロナの感染拡大が学生にどのような影響を及ぼすかに関して、その影響を検討した論文も多くみられた。例えば、住岡・和泉(2021)は、新型コロナウイルス感染症状況下において大学生が無気力を最も高く感じ、次いで抑うつ・不安、不機嫌・怒りの順でストレスを感じていること、そして、対処法として「仕方がないこととあきらめる」「大した問題ではないと考える」「考えないようにする」などの「回避型コーピング」を用いていることを明らかにした。また、橋本(2021)は、日常生活における制約がストレス反応を促進している可能性があること、そして、サポートやコーピングによるコロナ禍ストレスの緩和効果がほぼ示されなかったことを明らかにした。内田・黒沢(2021)はオンライン授業、すなわちVDT作業の時間が圧倒的に増えた状況における新入生の心身の状態について分析し、VDT症候群チェックリストにみられる「目が疲れる・ぼやける・充血する」「肩・首・背中が重い・痛い」「頭が重い・頭痛がある」等、大学生に様々な身体症状の訴えがあることを明らかにした。また、内田らの研究では精神的な健康が損なわれている可能性も示唆された。他にも「大学生版 COVID-19 感染拡大不安尺度の作成」を通してコロナ禍における不安をよりの確に把握しようと試みる研究(藤井, 2021)なども見られた。

近大でも2020年度に「“オール近大”新型コロナウイルス感染症対策支援プロジェクト」の一

環としてコロナ禍が学生に与えた影響についてアンケート調査を実施した。結果からは、他大学と同様にコロナ禍が近大生に多岐にわたる影響を与えたことが明らかとなった。具体的には授業形態の変化（対面授業からメディア授業へ）による学習への影響、対面授業が制限されたことから友人関係を築きにくいなどの人間関係への影響、アルバイトができないなどの経済への影響などが明らかとなった（熊本，2021）。また、身体的な健康あるいは精神的な健康においても不調を示す学生の存在が明らかとなった。例えば、身体的な健康に関しては「運動不足により体力の衰えや体調不良を抱えている」に「そう思う」と回答した学生は3割を超え、精神的な健康に関しても「憂鬱に感じる日が増えている」に「そう思う」と回答した学生は3割を超えていた。また、どちらの問いに関しても「どちらかと言えばそう思う」という回答を加えると6割を超えていた（向後，2021）。

その後、感染症の波は断続的に続き、大阪府では表1に見られるように緊急事態措置は計4回、まん延防止等重点措置は計3回、発出された。特に2021年は緊急事態宣言が3回、まん延防止等重点措置が2回、発出されるなど長期間に渡って自粛が求められた。しかしながら、ワクチン接種率の増加やコロナ対策等が進んだことにより大学でも徐々に対面授業が開始されるようになった。

表1 大阪府における緊急事態措置とまん延防止等重点措置期間

緊急事態措置	2020年4月7日～2020年5月21日
緊急事態措置	2021年1月14日～2021年2月28日
まん延防止等重点措置	2021年4月5日～2021年4月24日
緊急事態措置	2021年4月25日～2021年6月20日
まん延防止等重点措置	2021年6月21日～2021年8月1日
緊急事態措置	2021年8月2日～2021年9月30日
まん延防止等重点措置	2022年1月27日～2022年3月21日

<https://www.pref.osaka.lg.jp/kikaku/kinkyuzitai-yousei/index.html>より作成

ちなみに2022年度後期の東大阪キャンパスは、「令和4年度後期の授業実施形態について（通知）」に見られるように、学生に引き続きセルフプロテクションを求めている。通知では、大学が作成した「新型コロナウイルス感染症拡大防止のための手引き」を抜粋する形で「各自が常時不織布マスクを正しく着用すること（鼻から顎まで覆う状態）」を求め、さらに参考として、サージカルマスク規格を示し、併せてアルコール消毒液による手指消毒を求めている（近

畿大学, 2022)。一方で、第8波(2022/11/30~2023/1/24)の際も東大阪キャンパスでは、「令和4年1月17日以降の授業実施形態について(通知)」から分かるように「学内の密を分散しながら、対面授業とメディア授業を併用する形態」が選択されるなど、対面授業が維持されていた(細井, 2022)。

これに対し、2023年度4月1日以降は、大学構内においてはマスクの着用は個人の判断に委ねることを基本とすることが学長名で新入生並びに在校生、そして保護者に通知された(細井, 2023)。これは、厚生労働省(2023)がマスクの着用について、令和5年3月13日以降、「個人の主体的な選択を尊重し、個人の判断を基本とする」とし、屋内外を問わず、各自の判断によることを明示したこと、また、令和5年5月8日からコロナが「5類感染症」へ移行する予定であることを踏まえた対応と考えられる。そして、現在でもコロナ禍を脱したとはいええない状況ではあるものの学生の生活は2020年度当初より大きく変化している。

そこで本研究では、パンデミック(世界的流行)からエンデミック(一定の周期で繰り返される流行)に移行した後の、そして、マスク着用が個人の判断となり、5類感染症への移行した後の近畿大学生の心身の健康状態等について2020年度と比較して学生にどのような変化が見られたのかについて検討する。

2. 調査方法

(1) 調査項目並びに調査対象

① 「新型コロナウイルス感染症拡大が学生に与える影響に関する調査」

「新型コロナウイルス感染症拡大が学生に与える影響に関する調査(以下、2020年度調査)」は、「“オール近大”新型コロナウイルス感染症対策支援プロジェクト」の一部として実施された*1。近畿大学人権問題研究所内に設置する調査倫理審査会で承認を得たのち、2020年11月18日から12月23日の期間に、Google フォームを用いて調査を実施した。質問項目は10領域92項目。調査対象者は、1091名(女性486名、男性599名:回答では自認する性について尋ねた。男性・女性以外の回答は6名)。

② 「新型コロナウイルス感染症拡大が学生に与える影響に関する調査 2023」

*1 「新型コロナ感染症対策支援に対して何ができるのか」という問いに答えるために、新型コロナ感染症拡大が近畿大学生にどのような影響を与えているか、学生はいかに対応しているかを把握し、求められる支援のあり方を検討することを目的に企画された。詳細は巻末に記載。

「新型コロナウイルス感染症拡大が学生に与える影響に関する調査 2023（以下、2023年度調査）」は、2020年度に実施した10領域のうち、「自分の健康状態」「ストレスを含む精神状態」「感染への不安や感染予防」の3領域について実施した。ただし、「感染への不安や感染予防」については、マスクの着用が個人の判断になったことを踏まえて、10項目中5項目を選択した。なお、2020年度調査では、「新型コロナウイルス感染症拡大以降の『自分の健康状態』について、あなたはどう思いますか?」としたが、2023年度調査では「マスクの着用が個人の判断になった後の『自分の健康状態』について、あなたはどう思いますか?」とした。3-1～3-8、4-1～4-8、5-1～5-5の質問項目についての変更はない。また、2023年度調査では、新たな項目として「マスクの着用が個人の判断になったことで気持ちに変化はありましたか?」を追加し、変化があったと回答した場合は自由記述を求めた（記述は任意）。

2023年度調査は、2023年6月26日から7月24日の期間に、Google フォームを用いて実施した。調査対象者は、145名（女性53名、男性90名：回答では自認する性について尋ねた。男性・女性以外の回答は2名）。

表2 分析対象としたアンケート項目

1. 過去3ヵ月のあなたの健康状況は？	
2. 過去3ヵ月のあなたの精神状態（ストレス）は？	
3. 新型コロナウイルス感染症拡大以降の／マスクの着用が個人の判断になった後の「自分の健康状態」について、あなたはどう思いますか？	3-1. 運動不足により体力の衰えや体調不良を抱えている 3-2. 筋力の低下や体重の増加がある 3-3. オンライン授業等による目の疲れがある 3-4. 以前より頭痛がひどくなっている 3-5. 以前より腰痛がひどくなっている 3-6. 以前より睡眠不足になっている
4. 新型コロナウイルス感染症拡大症拡大後の／マスクの着用が個人の判断になった後のあなたの「精神状態（ストレスを含む）」について、どう思いますか？	4-1. 眠りが浅くなっている（寝付きが悪くなっている） 4-2. 感情のコントロールが難しくなっている 4-3. 自己肯定感が低下している 4-4. モチベーションが低くなっている 4-5. だるいと感じることが増えている 4-6. イライラすることが増えている 4-7. 物事に集中しにくくなっている 4-8. 憂鬱に感じる日が増えている
5. 「感染への不安や感染予防」について、あなたはどう思いますか？	5-1. 感染への不安を抱えながら生活している 5-2. 感染への不安から外出や移動が自由にできなくなっている 5-3. 感染対策や衛生管理を意識しながら生活している 5-4. 周囲の人間が感染に対して神経質・敏感になっているのを感じる 5-5. 感染に対して自分が周囲の人間に神経質・敏感になっている
6. マスクの着用が個人の判断になったことで気持ちに変化はありましたか？	

3. 結果と考察

2020年度調査と2023年度調査では回答数に差があるが、学年並びに男女の比率について有意差は認められなかった (図1 学年比率: $\chi^2(3) = 4.543, p = 0.208$ / 図2 男女比率 $\chi^2(1) = 3.065, p = 0.08$)。

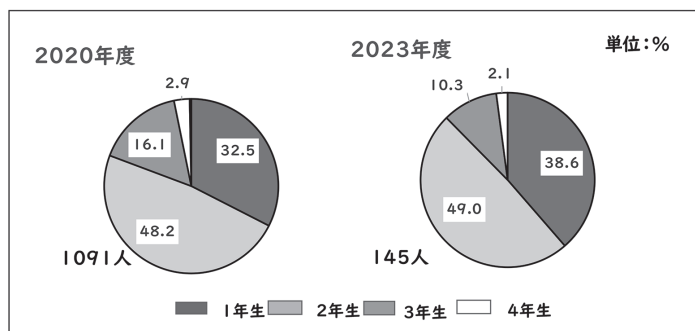


図1 回答学年

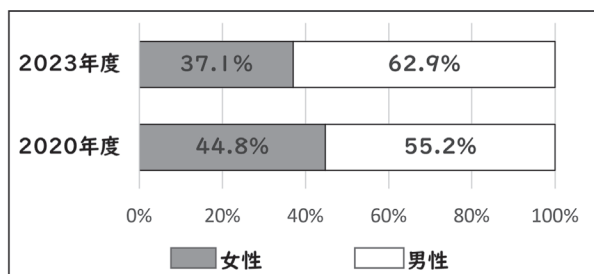


図2 男女比率

(1) 過去3ヵ月の健康状況と精神状態(ストレスを含む)について

過去3ヵ月の健康状況と精神状態について2020年度調査と2023年度調査の結果を比較した (図3)。 χ^2 検定を行った結果、いずれも有意な差が認められた (健康状況: $\chi^2(3) = 17.302, p < 0.001$ / 精神状態 $\chi^2(3) = 21.862, p < 0.001$) ため、残差分析を行った。その結果、過去3ヵ月の健康状況について、2023年度調査では2020年度調査よりも「改善している」と回答した学生の割合が有意に増加した (調整済み残差: 4.1 / $p < 0.01$ 水準で有意)。また、精神状態についても2023年度調査では2020年度調査よりも「改善している」と回答した学生の割合が増加し (調整済み残差: 4.1 / $p < 0.01$ 水準で有意)、「悪化している」と回答した学生

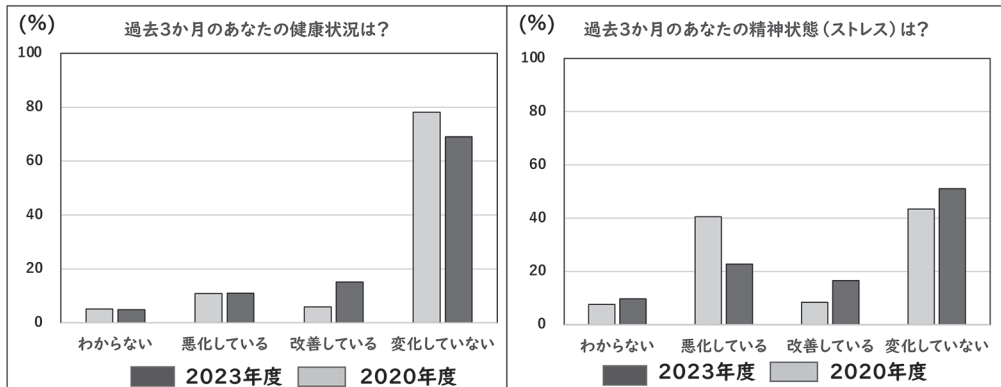


図3 過去3カ月の健康状況と精神状態

が減少するなど（調整済み残差：-3.1 / $p < 0.01$ 水準で有意）改善されている状況がより明確となった。

(2) 「自分の健康状態」について

2020年度調査では、新型コロナウイルス感染症拡大以降の、また、2023年度調査ではマスクの着用が個人の判断になった後の「自分の健康状態」について尋ねた。 χ^2 検定を行った結果、表3に示すようにいずれも0.1%水準で有意な差が認められたため項目毎に残差分析を行った。

表3 新型コロナウイルス感染症拡大以降（2020）/ マスクの着用が個人の判断になった後（2023）の「自分の健康状態」

	Pearson χ^2	自由度	漸近有意確率 (両側)
3-1. 運動不足により体力の衰えや体調不良を抱えている	62.839	3	<.001
3-2. 筋力の低下や体重の増加がある	47.432	3	<.001
3-3. オンライン授業等による目の疲れがある	263.245	3	<.001
3-4. 以前より頭痛がひどくなっている	34.844	3	<.001
3-5. 以前より腰痛がひどくなっている	48.968	3	<.001
3-6. 以前より睡眠不足になっている	26.308	3	<.001

その結果、図4に示すように「運動不足により体力の衰えや体調不良を抱えている」「筋力の低下や体重の増加がある」「オンライン授業等による目の疲れがある」「以前より頭痛がひどくなっている」「以前より腰痛がひどくなっている」「以前より睡眠不足になっている」の6項

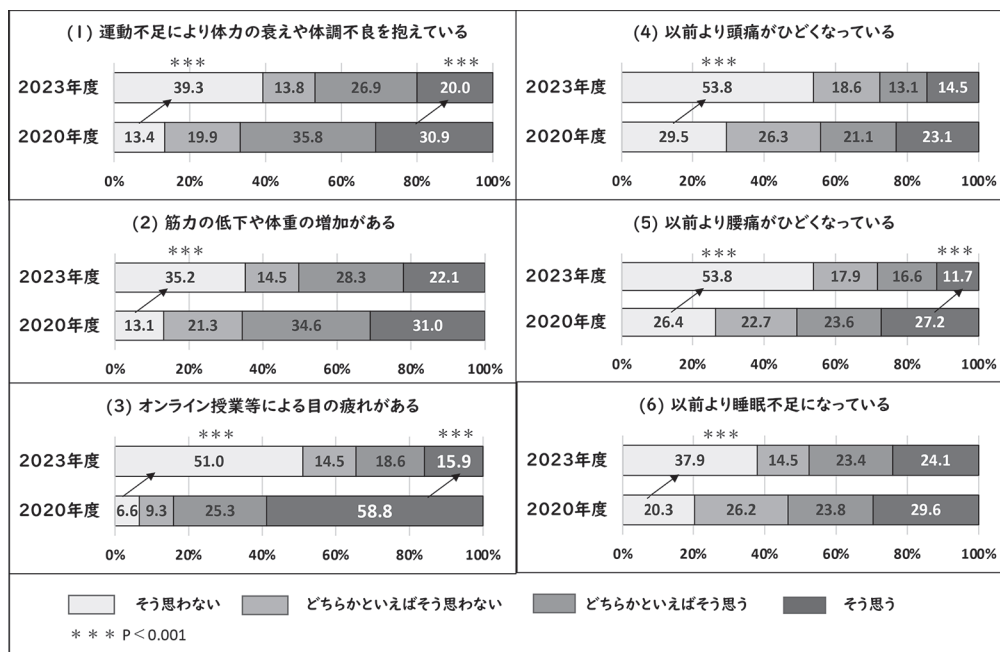


図4 新型コロナウイルス感染症拡大以降(2020)／マスクの着用が個人の判断になった後(2023)の「自分の健康状態」

目のいずれにおいても「そう思わない」と回答した学生が有意に増加した。また、「運動不足により体力の衰えや体調不良を抱えている」「オンライン授業等による目の疲れがある」「以前より腰痛がひどくなっている」の3項目においては、「そう思う」と回答した学生が有意に減少した。特に「オンライン授業等による目の疲れ」については、2020年度調査では、58.8%が「そう思う」回答し、「そう思わない」と回答した学生は6.6%であったのに対し、2023年度調査では「そう思う」回答した学生が15.9%、「そう思わない」と回答した学生が51.0%と回答率が逆転している。質問では「オンライン授業等による目の疲れ」と授業形態による影響を中心に尋ねているが、2020年度はオンライン授業等の導入により必然的にパソコン等を視聴する時間が多くならざるを得なかっただけでなく、外出自粛などにより在宅時間が増え、学業以外にもスマホ等で動画を視聴する時間が増えたことも関連していたと考えられる。実際、KDDI株式会社(2022)が行った「新型コロナ禍以前と以降、エンタメの楽しみ方の変化と休暇の過ごし方調査」においても「動画配信サービスの利用」については、全体の26.0%が「増えた」と回答し、「やや増えた」と合わせると46.3%の人が増加したこと、特に10代は39.0%が「増えた」と回答するなど、若年層の利用率が高くなっていることが報告されている。また、長時間の

VDT 作業では、目の疲れ以外に腰痛や頭痛なども起きることが知られている（厚生労働省，2008）が、「以前より頭痛がひどくなっている」「以前より腰痛がひどくなっている」に関して、2023年度調査では、約5割の学生が「そう思わない」と回答しており、統計的にも有意に改善が認められた。「運動不足により体力の衰えや体調不良を抱えている」に関しては曾我部・山崎・桂・水澤・伊東・吉本・鶴木（2023）の研究でも2022年度は2020年度と比較して「身体活動量の増加傾向が見られた」と報告されており、メディア授業中心から対面授業中心への授業形態の変化が学生の健康状態の改善に影響したと考えられる。

このように2020年度調査時点と比較して全体的に健康状態は改善されているものの、マスクの着用が個人の判断になった後、それ以前と比較して「そう思う」と回答した学生が各項目に1割～2割程度いることについては留意する必要がある。

(3) 「あなたの精神状態（ストレスを含む）」について

2020年度調査では、新型コロナウイルス感染症拡大以降の、また、2023年度調査ではマスクの着用が個人の判断になった後の「精神状態（ストレスを含む）」について尋ねた。 χ^2 検定を行った結果、表4に示すようにいずれも0.1%水準で有意な差が認められたため項目毎に残差分析を行った。

表4 新型コロナウイルス感染症拡大以降（2020）/マスクの着用が個人の判断になった後（2023）の「精神状態（ストレスを含む）」

	Pearson χ^2	自由度	漸近有意確率 (両側)
4-1. 眠りが浅くなっている（寝付きが悪くなっている）	53.969	3	<.001
4-2. 感情のコントロールが難しくなっている	73.703	3	<.001
4-3. 自己肯定感が低下している	79.983	3	<.001
4-4. モチベーションが低くなっている	132.287	3	<.001
4-5. だるいと感じることが増えている	101.294	3	<.001
4-6. イライラすることが増えている	101.294	3	<.001
4-7. 物事に集中しにくくなっている	70.010	3	<.001
4-8. 憂鬱に感じる日が増えている	118.778	3	<.001

その結果、図5に示すように「眠りが浅くなっている（寝付きが悪くなっている）」「感情のコントロールが難しくなっている」「自己肯定感が低下している」「モチベーションが低くなっ

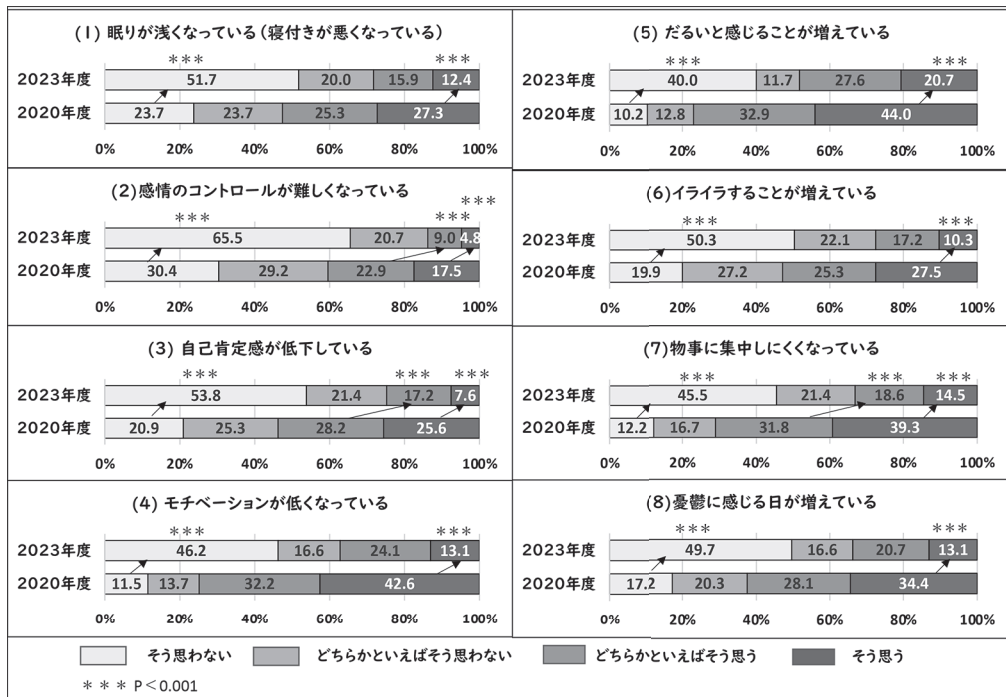


図5 新型コロナウイルス感染症拡大以降(2020)／マスクの着用が個人の判断になった後(2023)の「自分の精神状態」

ている」「だるいと感じるが増えている」「イライラすることが増えている」「物事に集中しにくくなっている」「憂鬱に感じる日が増えている」の8項目のいずれにおいても、「そう思わない」という回答が有意に増加し、「そう思う」という回答が有意に減少した。

また、2020年度調査において、「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」の合計が7割を超えていた3項目については、それぞれ「モチベーションが低くなっている：74.8%→37.2%(-37.7%)」「だるいと感じるが増えている：76.9%→48.3%(-28.6%)」「物事に集中しにくくなっている：71.0%→33.1%(-37.9%)」と減少幅が大きかった。

以上の結果から、近畿大学生の精神状態は全体として改善傾向にあることが示されたといえる。こうした結果は、2020年度から3年連続で調査を行い、新型コロナウイルス感染症関連について全体的にストレス度合いが下がっているとした東京大学ピアサポートルーム(2022)の報告とも一致する。また、全国大学生生活協同組合連合会による第58回(2022年秋実施)学生生活実態調査速報(2023)によれば、「学生生活充実度は、コロナ禍前の19年の水準にほぼ回復」していることが示されており、大学生活が充実することで、全体的に精神状態も改善した可能性が

考えられる。

一方、曾我部ら（2023）の研究では、心理ストレス3要因である「不機嫌・怒り」「抑うつ・不安」、「無気力」の全てにおいて2022年度は2020年度と比較して高い数値を示す結果となった。また、コロナ拡大前（2019）、拡大直後（2020）、拡大1年後（2021）の新生を対象とした岐阜大学の調査では、感染拡大直後の新生の抑うつ、不安症状が拡大前より低い結果となったこと、拡大1年後の新生の抑うつ、不安症状は、拡大直後より高くなったが、拡大前の水準に戻ったこと、ただし、死にたい気持ち（希死念慮）を強く抱える学生の割合は年々増加傾向にあることが報告されている（岐阜大学広報室，2022）。なお、これらの研究は、いずれも各年度の前期に行われた調査であり、本研究と同様に2023年度のマスクの着用が個人の判断に変更された後に調査を実施した場合にはより改善された結果が示唆される可能性が残されている。

(4) 「感染への不安や感染予防」について

2020年度調査では、新型コロナウイルス感染症拡大以降の、また、2023年度調査ではマスクの着用が個人の判断になった後の「感染への不安や感染予防」について尋ねた。χ²検定を行った結果、表5に示すようにいずれも0.1%水準未満で有意な差が認められたため項目毎に残差分析を行った。

表5 新型コロナウイルス感染症拡大以降（2020）/マスクの着用が個人の判断になった後（2023）の「感染への不安や感染予防」

	Pearson χ ²	自由度	漸近有意確率 (両側)
5-1. 感染への不安を抱えながら生活している	284.610	3	<.001
5-2. 感染への不安から外出や移動が自由にできなくなっている	458.209	3	<.001
5-3. 感染対策や衛生管理を意識しながら生活している	286.685	3	<.001
5-4. 周囲の人間が感染に対して神経質・敏感になっているのを感じる	369.645	3	<.001
5-5. 感染に対して自分が周囲の人間に神経質・敏感になっている	292.208	3	<.001

その結果、図6に示すように「感染への不安を抱えながら生活している」「感染への不安から外出や移動が自由にできなくなっている」「感染対策や衛生管理を意識しながら生活している」「周囲の人間が感染に対して神経質・敏感になっているのを感じる」「感染に対して自分が周囲の人間に神経質・敏感になっている」の5項目のいずれの回答においても「そう思う」と

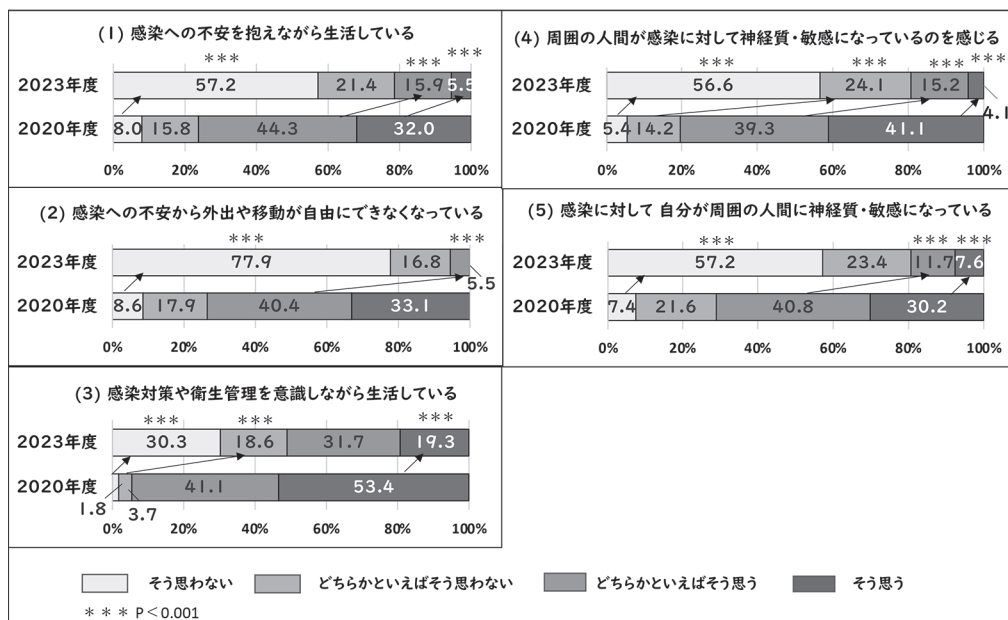


図6 新型コロナウイルス感染症拡大以降(2020)／マスクの着用が個人の判断になった後(2023)の「感染への不安や感染予防」

いう回答が有意に減少し、「そう思わない」という回答が有意に増加した。特に、「感染への不安から外出や移動が自由にできなくなっている」に関しては、2023年度調査において「そう思う」と回答した学生は0.0%であった。しかし、その一方で「感染対策や衛生管理を意識しながら生活している」学生は「どちらかといえばそう思う」までを含めると51.0%と約2名に1名は現在も感染症への対策を意識している現状がある。この点については、日本赤十字社(2023)の調査において「行動に制限が少なくなっているが、感染への不安は残っている(高校生55.8%/大学生41.2%)と半数近くが感染を心配」しているという結果からもわかるようにコロナ禍の影響は続いていると考えられる。

また、「マスクの着用が個人の判断になったことで気持ちに変化はありましたか」に「変化があった」と回答した学生(37名)と「変化がなかった」と回答した学生(108名)について表1の3-1～5-5までの回答傾向に差があるかを χ^2 検定で検討した結果、有意差が認められたのは、「感染対策や衛生管理を意識しながら生活している」の1項目のみであった($\chi^2(3) = 15.362, p < 0.01$)。「変化があった」と回答した学生は「そう思う」という回答が、「変化がなかった」と回答した学生は「そう思わない」という回答が多かった。

「変化があった」と回答した学生の自由記述の回答には、「今までの束縛がなくなって解放さ

れた感じがした。マスクは好きじゃなかったのでもいいのは気分がいい」「たとえマスクしなくても変な目で見られないから安心する」「マスクを着ける必要が無くなって楽になった」「以前よりも開放的になり、過ごしやすくなった」という肯定的な意見と「私は普段からマスクを着用していますが、隣の席の人などがマスクをしないで話している時にはやはり気になってしまう（嫌悪感？）部分があります」「マスクの着用が個人の判断になったことで感染拡大が起きてしまうのではないかという不安な気持ちになった」という否定的な意見の両方が見られた。

気持ちの変化については否定的な意見にみられるように周囲がマスクを外していることで感染リスクが高まることを危惧した結果、「感染対策や衛生管理を意識しながら生活している」により「そう思う」と回答した可能性が考えられる。

4. おわりに

同一項目について尋ねた2020年度と2023年度のアンケート調査の結果からは、身体的な健康、精神的な健康のいずれについても改善が認められる学生は増加したが、支援を必要とする学生が一定数、存在する可能性もまた示唆されたと考える。また感染への不安や感染予防に関しては、大幅な変化が認められ、学生生活並びに日常生活での活動制限や不安が減少していることがあきらかとなった。一方で「感染対策や衛生管理を意識しながら生活している」学生も少なくないこと、自由記述の回答からマスクをしていないことへの不安も垣間見えることなどからマスク解禁後の生活についての反応は一律に良い方向に向かっていると結論づけることは難しいかもしれない。今後、新型コロナ感染症がどのように拡大、または、収束するかを予測することは困難だが、コロナがパンデミックからエンデミックに移行する中で学生のおかれた状況を都度、把握し、その時々に必要なに応じた支援が求められる。

引用文献

藤井義久（2021）新型コロナウイルス感染拡大が大学生に及ぼす心理的影響—COVID-19 感染拡大不安尺度開発に向けた予備的検討—岩手大学教育学部附属教育実践・学校安全学研究開発センター研究紀要、第1巻、pp.195-204

岐阜大学広報室（2022）コロナ禍が大学生のメンタルヘルスに与えた影響を実証～岐阜大学新入生のデータを3年間比較検討～ <https://www.gifu-u.ac.jp/about/publication/>

- press/20220112.pdf (9月12日最終閲覧)
- 橋本剛(2021) コロナ禍初期における大学生の心理社会的ストレスに関する探索的検討：社会規範としての援助要請スタイルの効果も含めて 静岡大学人文社会科学部人文論集, 71 (2) pp.15-34
- 近畿大学(2022) 東大阪キャンパス令和4年度後期の授業実施形態について(通知) <https://www.kindai.ac.jp/news-pr/important/2022/09/036546.html> (9月6日最終閲覧)
- 厚生労働省(2008) 平成20年技術革新と労働に関する実態調査 <https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/48-20.html> (9月30日最終閲覧)
- 厚生労働省(2023) マスクの着用について https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kansentaisaku_00001.html (9月30日最終閲覧)
- 細井美彦(2022) 1/13 東大阪キャンパス 令和4年1月17日以降の授業実施形態について(通知) <https://www.kindai.ac.jp/news-pr/important/2022/01/034754.html> (9月6日最終閲覧)
- 細井美彦【在学生・保護者の皆様へ】令和5年度授業の実施について <https://www.kindai.ac.jp/news-pr/important/2023/03/038281.html> (9月6日最終閲覧)
- 細井美彦【新入生・保護者の皆様へ】令和5年度授業の実施について <https://www.kindai.ac.jp/news-pr/important/2023/03/038282.html> (9月6日最終閲覧)
- 一般社団法人 日本私立大学連盟(2022) 新型コロナウイルス禍の影響に関する学生アンケート報告書(概要版) https://www.shidaiaren.or.jp/files/topics/3680_ext_03_0.pdf (9月6日最終閲覧)
- KDDI株式会社(2022) 新型コロナ禍以前と以降、エンタメの楽しみ方の変化と休暇の過ごし方調査 <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000784.000034485.html> (9月6日最終閲覧)
- 向後礼子(2021) 「“オール近大” 新型コロナウイルス感染症対策支援プロジェクト」におけるアンケートならびにインタビュー調査の結果から一心身の健康と教育実習に関する報告—近畿大学教育論叢, 33, 1, pp.197-217
- 熊本理抄(2021) 「“オール近大” 新型コロナウイルス感染症対策支援プロジェクト」におけるアンケートならびにインタビュー調査の結果から—大学生が直面した困難の分析と大学による支援の検討— 近畿大学教育論叢, 33, 1, pp.139-172

日本赤十字社 (2023) 『2023年新型コロナ禍と若者の将来不安に関する調査』 https://www.jrc.or.jp/press/2023/0313_031519.html (9月30日最終閲覧)

文部科学省 (2020) 学校の卒業式・入学式等の開催に関する考え方について (令和2年2月25日時点) https://www.mext.go.jp/content/20200225-mxt_kouhou02-000004520_02.pdf (9月30日最終閲覧)

文部科学省 (2020) コロナ対応の現状, 課題, 今後の方向性について 今後の国立大学法人等施設の整備充実に関する調査研究協力者会議 (第5回) https://www.mext.go.jp/content/20200924-mxt_keikaku-000010097_3.pdf (9月30日最終閲覧)

文部科学省 (2020) 新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について https://www.mext.go.jp/content/202000513-mxt_kouhou01-000004520_3.pdf (9月30日最終閲覧)

大阪府 (2023) これまでの法に基づく要請等について <https://www.pref.osaka.lg.jp/kikaku/kinkyuzitai-yousei/index.html> (9月30日最終閲覧)

曾我部晋哉, 山崎俊輔, 桂豊, 水澤克子, 伊東浩司, 吉本忠弘, 鶴木千加子 (2023) COVID-19パンデミックが大学生の身体活動量及び心理ストレスに及ぼす影響について: 2020~2022年度の調査より 甲南大学スポーツ・健康科学教育研究センター紀要 巻24, pp.1-8,

住岡恭子・和泉里佳 (2021) 新型コロナウイルス感染症状況下における大学生の主観的ストレス 岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要 第52号, pp.11-27

東京大学ピアサポートルーム (2022) 「新型コロナウイルス感染症に伴うストレスに関するアンケート」結果公表-II <https://ut-psr.net/2022/07/23/2022stress02/> (9月12日最終閲覧)

内田知宏・黒澤泰 (2021) コロナ禍に入学した大学一年生とオンライン授業—心身状態とひきこもり願望— 心理学研究第92巻第5号, pp.374-383

全国大学生生活協同組合連合会 (2020) 緊急! 大学生・院生向けアンケート https://www.univcoop.or.jp/covid19/enquete/pdf/link_pdf02.pdf (9月6日最終閲覧)

全国大学生生活協同組合連合会 (2023) 第58回 (2022年秋実施) 学生生活実態調査速報 https://www.univcoop.or.jp/press/life/report58_01.html (9月16日最終閲覧)

【補足】

「COVID-19 および SDGs の時代におけるレジリエントな社会づくりに関する調査研究」ブ

プロジェクトについて「新型コロナウイルス感染症対策支援に対して何ができるのか」という問いに応えるために、新型コロナウイルス感染症拡大が近畿大学生にどのような影響を与えているか、学生はいかに対応しているかを把握し、求められる支援のあり方を検討することを目的に企画された。調査プロジェクトの共同研究者(以下、共同研究者)は以下のとおりである。

調査プロジェクト共同研究者

Andrew Atkins (国際学部) / 奥田祥子 (社会連携推進センター)

熊本理抄 (人権問題研究所) プロジェクト代表

向後礼子 (教職教育部) / 高橋朋子 (グローバルエデュケーションセンター)

新田和宏 (生物理工学部) / 藤田 香 (総合社会学部)

宮本多幸 (経営学部) / 安田直史 (社会連携推進センター) / 保本正芳 (総合社会学部)